

第5回 高知県史編さん委員会

日時：令和8年9月7日（月）

13時30分～15時00分

場所：高知県庁本庁舎2階 第二応接室

出席委員：濱田委員長、藤井副委員長（監修者）、古谷委員、並村委員、北代委員、
今城委員、井上委員、渡部委員、羽賀委員、大門委員、鋤柄委員、常光委員、
岡本委員、原委員（オンライン）

※代理出席：竹内委員、松村委員

事務局：依光部長、小椋副部長、（歴史文化財課）山崎課長

（県史編さん活用課）濱田課長、橋本課長補佐、紀ノ國チーフ、目良主幹、
松本主幹、大野主査、深谷主事、岩山主事、村越主事

1 開会

今年度より新たに着任された委員の方々の紹介

2 委員長（高知県知事）挨拶

濱田委員長より開会挨拶

- ・この委員会は年1回の会議というのが通常のペースでということなので、今年度の進捗状況のチェックが主なミッションであると思っている。
- ・今年度の自然部会立ち上げにより、予定されていた専門部会はすべて設置したことになる。この体制が整ったところで、それぞれの部会において、調査や刊行に向けた議論が精力的に進めていただけたと考えている。
- ・今年度末には、「資料編近世1」の発刊が予定されているということで、準備がされていると聞いている。県民の皆さまにも、過去5、6年に渡り形になってきた県史編さんの事業を、確実に形になっていることを認識いただけるきっかけが作れる年になると期待をしている。
- ・今後の刊行物の発刊を考えると、一冊一冊の内容を限られた時間内で検討し、仕上げていただくということで大変厳しいものになるが、引き続き、各委員の皆さまにはご協力をお願いしたい。
- ・県史の編さんにあたり、県民や関係者の皆さん以外の方も含めて、ご意見、ご注文をお伺いしている中で、人権や個人情報の扱いについてもご意見、問題提議があり、どういう形で取り扱っていくかということを、関連の専門部会や委員会で議論を行っている。最終的に県の刊行物として整理していくということであるので、県民の人権を侵害することがあってはいけないと思っている。そう意味で、取り扱いについては、関係の部会、委員会を中心に十分に配慮いただき、検討をお願いしたい。
- ・最後に、これまでも一貫してお願いしているのは、県史の調査結果をできるだけ分かりやすい形で、早期に県民の皆さんにお示しする、還元すること。
- ・事業のボリュームが増えてきたということもあり、今年度は、担当課も室から課へ昇格させた。昇格にあたり、私の気持ち、期待をこめて、単に「県史編さん課」ではなく、「県史

編さん活用課」という組織にし、県民の皆さんに活用いただく、この県史編さんの意義、
値打ちを県民の皆さんに十分にご理解いただき、「こういうものを整理してもらってよか
った」という、県民の皆さんの誇り、喜びになる活用を進めていくということを認識いた
だきながら、作業を進めていただくということを重ねてお願いしたい。

- ・本日は忌憚のないご意見をいただければと思っている。どうぞよろしくお願いしたい。

3 副委員長（高知県史監修者）挨拶

藤井副委員長より挨拶

- ・今年度、8部会の最後の部会、自然部会が立ち上がることとなり、県史編さんの体制が、
ひとまず固まったことになった。
- ・今年は、県史の第1冊目にあたる刊行物を今年度末3月には刊行する運びとなっている。
決して容易なことではなく、事務局を含めて経験をしていないことであるため、鋭意努
力して刊行に取り組んでもらっている。約束通り刊行できればと思う。
- ・県史編さんの動きを「とさぶし」の2ページいただき、県民の皆さんにお知らせし、県
史編さんのニューズレターを刊行し、令和6年度から刊行し、少しでもご理解いただけ
ればと続けて刊行していきたい。
- ・報告を中心とした会になるが、どうぞよろしくお願いしたい。

4 報告事項

（1）～（3）について、事務局より一括説明。

（4）については、近代部会、考古部会、民俗部会、自然部会は事務局より説明し、
その他部会は、部会長より説明。

（1）高知県史の取り組み状況について

<高知県史の概要>

- ・令和3年度から開始した新たな高知県史の編さんは令和22年度までで、32巻の刊行を
予定している。
- ・今年度は自然部会を立ち上げ、予定していた専門部会はすべて立ち上げた。
- ・『高知県史』の初刊『高知県史 資料編近世1』の取り組みを進めている。

<昨年度の実績について>

- ・設置初年度であった文化財部会を除く6部会で、編集方針は策定済み。
- ・近世部会においては、初刊に掲載する資料の翻刻（活字化）が完了しており、民俗部会
においては、文献リストの作成や市原麟一郎氏の民話テープのデータなど、来年度の発
刊に向けた調査が進んでいる。
- ・「とさぶし」、「ときのあかし」では、各部会での調査の様子を写真も交えて紹介。
- ・四万十市にて、考古部会が講演会を実施し、山城の調査結果を報告。市史編さんを進め
ている四万十市と知見を共有した。

<今年度の計画について>

- ・文化財部会及び自然部会の編集方針の策定、自然部会の第二期計画の策定を予定。
- ・部会により、調査回数にばらつきがあるが、実績は増加見込。近代部会においては、旧一宮村（現高知市一宮）の兵事資料が非常に貴重な資料であるということで、撮影のための解体及び再製本を委託で実施する。

<第一期の総括（最終）について>

- ・前回の編さん委員会で報告した総括を、最終年度が終了した実績を踏まえて、各部会が検討し、評価を行った。
- ・多くの部会が、初刊の発刊のほか、次刊の発刊を見据えて調査ができている。
- ・計画より遅れている部会はなく、第一期の総括としては、おおむね順調に進んでいる。

（２）高知県史の掲載内容等に関する要望等について

- ・昨年度の編さん委員会以後、いただいた要望とその対応を説明。
- ・令和４年度にも要望のあった大寺廃寺の発掘調査については、地元自治体や部会と連携しながら調査を進めていく。
- ・前回の編さん委員会で委員から要望のあった、山嶽社・和田三郎については、近代部会が取り上げていくこととし、また、高校職員に対する見学会や研修会の要望については、高知市内の学校を中心に個別にあたり、見学会の参加につながった。
- ・同和問題の取り上げ方に関する方針の策定については、「人権的な配慮を要する事項については、編集委員会において、「人権的な配慮を要する事項及び個人情報等の取扱いに関する方針」を策定し、各部会がこれに基づいて編さんを進めていく。
- ・この要望については随時ホームページに掲載していく形で進めていく。

（３）広報啓発・人材育成について

- ・県広報誌「とさぶし」では、４ページに渡って掲載している。読者アンケートでも好評をいただいているため、継続していきたい。
- ・「ときのあかし」では、各部会の調査で得られた成果を掲載している。令和６年度に刊行した「ときのあかし」の近代部会で取り上げた宮尾登美子の教職員履歴簿は、県立文学館の企画展にて、写真（資料の複製）を展示し、多くの県民の方に見ていただき、活用を行った。
- ・高知市文化振興事業団が開催している「高知市民の大学」の場で、文化財部会の調査の成果を講演する。
- ・地元高校生の見学では、高知追手前高等学校や高知学芸高校の生徒に参加いただいた。今年度も、高校に声がけをし、継続して実施する。

(4) 高知県史の取り組み状況について

①近代部会

- ・この1年間、県内外の関係資料の調査と撮影、令和9年度刊行予定『資料編近代2』の編集作業を進めてきた。
- ・調査については資料4-1に掲載のとおりであるが、特に旧町村役場資料については継続的調査を実施、県内自治体での調査は一部を残して終えた。
- ・発刊へ向けて、全10章の担当委員と頁割りを決め、各担当委員が掲載資料候補の選定を進めており、その進行状況を確認するために部会に合わせて「作業報告会」を行い、進捗管理に努めている。

②考古部会

- ・『資料編1』の刊行に向け、旧石器時代から古墳時代までの原稿を作成している。
- ・今後は、昨年話題になった刻書土器の科学分析や龍河洞出土の鉄鏃の再評価し、大高坂・高知城下の再評価のほか、分かりやすい考古編の刊行のため、教員との連携を予定している。
- ・若宮ノ東遺跡の刻書土器に関しては、土器の変遷を検討し、日本史での位置付けを図ると共に、地球科学の専門家と連携し、製作地の特定や年代測定等の分析にも取り組む予定である。

③民俗部会

- ・令和7年度の合同調査は幡多地域で実施し、四万十川の川漁や土佐清水市の民謡「バラ抜き節」などについて聞き書きを行い貴重な成果を得た。本年度の合同調査は、物部川流域を対象に行う予定である。
- ・『本編1』の巻頭に掲載する民俗地図作成のためのアンケート調査を精力的に行っている。
- ・令和9年度刊行予定の『資料編民俗1 民話・民謡・地名』については、全体の構成と資料がほぼ整い、現在執筆中。本年度内には書き終える予定である。

④自然部会

- ・掲載する対象として、地形・気候・植物・生物・地質などのいわゆる「高知県の自然」に関すること、また、地震や台風、豪雨など、県が経験してきた自然災害の記録と、県民が積み重ねてきた復旧・復興の取り組みについても掲載を予定。
- ・令和15年の本編刊行に向け、本年度は、今後の調査や執筆の体制づくりに向けた第一・二期計画の協議など、部会発足に伴う運営や協議を進めている。

⑤古代・中世部会

- ・関連する文書を鋭意調査している。高知県下の古代・中世史料は数が限られていると認識していたが、3000点を超える古文書のデータを集めている。これらを網羅すること

で、これまでの古代・中世の理解の仕方が代わっていくのではないかな。

- ・原文書が残っているものは鋭意調査を進めている中で、『香宗我部家伝証文』を紹介。例えば、「豊臣兄弟」に関わる小牧・長久手の戦いに関する文書が多数あるなど、歴史の中心ともいえる、非常に貴重な文書である。この文書は、江戸時代の初め、長宗我部氏が滅んだ際に、関東の大名へ仕官し、高知から流出して以後、高知県には戻ってきていない。実現できればと考えているのは、県史の編さん事業を行っている間に、この文書群を高知県下に運び、県民の皆様に見ていただく機会を作れることを、国立東京博物館の執行部にはお願いをしているところである。そうした機会があれば、県史の活動を、県民の皆様に戻元するという意味で、広くお示しできるのではないかなと思う。
- ・大名だけでなく、村落（荘園）が持っている文書を高知県はたくさん持っている。中央から離れた高知で、中世の村落の資料が数百点という形で残っているのは、非常に注目すべきところ。これらも調査を進めていき、古代・中世の見識を変えるということができたかなと考えている。

⑥現代部会

- ・現代部会では、令和9年度末発刊予定『資料編現代1』の編集作業を進めている。『資料編現代1』に収録予定の災害資料と併せて、それを例に県史の活用方法を紹介。
- ・昭和30～50年代の災害資料の中には、県、市町村、民間と、作成主体が異なる資料がある。県は広域行政として、教訓と反省をまとめ、市町村は、基礎自治体として地域に密着した特性が災害資料にも反映しており、民間が作成した『その手を放すな』には、その時代においては貴重な、多様な立場にある女性の視点（老人・身障者・病人・妊婦、妻・母・主婦）が反映されている。現代において、このような作成主体が異なる資料を繋げてみると、それぞれの資料の特性や足りない部分が浮かび上がってくる。それぞれの立場から作成された資料を組み合わせたときに、よりよい防災の計画を作ることができるのではないかな。
- ・土佐山田町の繁藤での山崩れの際は、地域の特性をよく知る高齢者によって、生き埋めになった人を救った事例がある。また、黒潮町の砂浜美術館は逆転の発想で、美術館なのに箱物（施設）を作らず、Tシャツアートなど、毎年変わる展示を行い、防災計画を作り上げた。このような地域の特性を発見することは容易なことではないが、災害資料を調査することで、地域の特性を再認識、再発見できるのではないかな。県史もそうしたことに活用できるのではないかなと考える。

⑦文化財部会

- ・民俗、天然記念物、史跡、文化的景観と各分野の委員が積極的に調査を行っている。史跡名勝及び有形文化財は2刊目に収載となるが、考古部会と合同で調査を行っている。
- ・初刊の原稿例を書き、どういった問題が出てくるか検討をしている。掲載する写真や文献、過去の写真についても調査をしている。
- ・東洋町で起きた宝永地震後の土砂災害では、集落が埋まってしまったという話を聞き、

実際に、現地を調査したところ、棟札に記録されていた。

- ・土砂災害跡の集落地下から、墓塔が出土した例もある。調査をしていると、災害の痕跡が文化財に残っていることがわかってきているため、災害に役立つ活用をしていきたい。

⑧近世部会

- ・令和6年度から、全4巻分の収録資料を検討しており、活字化も進めている。2巻目以降を視野に入れた作業を進めており、自治体史編さんを進めている基礎自治体で見つかった資料とも連動しながら、連携を深めている。
- ・『資料編近世1』については、5月に入稿し、初校を原本と突き合わせた。9月中に校正し、全3回の校正後、12月末に校了し、3月末に発刊を予定。
- ・収載する資料の主題は「支配の枠組み」である。主な資料は、山内家、五藤家、桐間家（現加賀野井家）、森家などの武家資料から、枠組みに関するものを抽出した。
- ・高知県は資料集が多く作られ、県立図書館などから発刊されているため、これまで活字化、発刊されていないものに力をいれ、皆さんが使える資料を増やしていくことを方針として資料を選定。
- ・「領知」「法令」「国勢」「藩志内篇」の4章構成とし、「藩志内篇」以外は単発の資料を掲載。
- ・『藩志内篇』は、幕末に編さんされた土佐藩の通史で、江戸時代初めから江戸後期までの出来事とその根拠資料を引用したものである。土佐藩の流れを大きく掴むことができ、武家文書が公開される以前は、土佐藩政史として中心に研究されてきたが、活字化されたことがなかった。今回活字化することで、今まで知られていなかった事実や、見るべき資料が豊富にあることが分かった。この『藩志内篇』が土佐藩研究や地域の活動のもとになるということで、収録した。
- ・山内家には歴代将軍が出した領知判物に関する資料がすべて残っており、全点活字化した。文言の使い方や宛名の位置で、個性や将軍の前での大名の格付けなどがわかる。「土佐二十四万石」に関する資料を紹介。
- ・『徳川秀忠領知判物』によると、「七郡貳拾万貳千六百石」とあり、「土佐藩二十四万石」が通説であることがわかる。また、『上申書控』からは、豊臣時代から徳川時代にかけての土佐藩の領地高の変遷がわかる。こうした全国の研究に通用する資料を、『資料編近世1』には力を入れて掲載。
- ・今後の活用方法について、資料編の活用の仕方をホームページで掲載する、学校現場へ情報を提供し、教員と交流するほか、県内数カ所で、活用方法の説明会の実施を検討している。特に、『藩志内篇』は、各地の歴史が書かれているため、必ず各地に関連する情報がある。その地域に関係するものを抽出し、具体的な説明を行う。
- ・歴史愛好家はもちろん、行政が政策に役立てる情報もあり、教育現場での情報にもなるため、活用していこうと考えている。

【質疑応答】

■並村委員

- ・高校生の見学会に参加した生徒の中には、元々歴史などが好きで参加したこともあるが、この見学会に参加し、更に興味を深めて、大学でそうした進路に進学した事例もある。人材育成という面では意義あることではないかと思う。
- ・高校生に周知するだけでは、参加が難しい。教員が、生徒たちを引っ張っていける立場にあれば、裾野が広がるのではないか。昨年も同じような要望があっているが、高校生の裾野を広げる以前に、高校教員が興味、関心を持てるような取り組みを進めていただきたい。

→（事務局）

- ・高校生が見学に来ていただけることは大変ありがたい。その前に、教員に興味関心を持っていただけるように、事務局でも検討したい。

■北代委員

- ・宿毛市では、宿毛の27人の偉人ということで、小中学生が偉人について調べ学習をしていこうとなっている。今までも、小野梓をピックアップして、絵画コンクールや作品コンクールを実施している。地元の偉人について宿毛市の皆さんに知っていただける、キャリア教育に繋がる方向性を出す取り組みをしている。

■今城委員

- ・昨年度から教育委員会で力を入れているのは、キャリア教育。本県が特に大事にしているのが、「郷土への理解と愛着を育む」こと。子どもたちが、歴史を含め郷土の文化や産業の理解を深め、一度高知を出てしまっても、高知を思い出して、いずれ帰ってきてくれたらということを踏まえて力を入れている。キャリア教育との関連でコラボもできればと考えているため、担当部局とも連携していきたい。

■古谷委員

- ・子どもたちが高知県の歴史に触れ、偉人の輩出や出来事を理解すると郷土愛が深まると同時に、進学等で県外へ出ても、高知県へ帰ってきて、郷土の為に何かをしたいという気持ちが湧いてくると思う。
- ・県史を早い段階から、子どもたちの目に触れさせて、目に触れさせることが難しければ、耳から入るように。今の子どもたちは、中々文字を読まないが、スマホはよく見る。SNSなど、今の需要のものを使って、子どもたちにいかに高知県史をわかってもらうかということ。一般の人が目に触れることは少ないと思う。段階的に、出来上がったものを、わかりやすく、誰もが目に触れることができるようにしていけば、高知県史への愛着や理解に繋がると思う。
- ・高知県は素晴らしい人材を輩出しており、それを契機に高知へ訪れる観光客がたくさんいる。そうした方々が触れる機会が多く出してもらえたらよいのではないか。

→（事務局）

- ・教育分野との連携や活用についても、更に力を入れて進めていきたい。

4 副委員長（高知県史監修者）総括

藤井副委員長よりコメント

- ・県史編さんの調査、あるいは本を作る中で、いかに一般の県民の方、特に若い世代、教員の方へ訴えかけるかという努力が必要だという指摘をいただいた。
- ・この点については、できる限りのことをすべきだと思う一方で、県史編さんの、特に資料編の刊行は、それぞれの基礎的な事実をきちんと固め、将来に渡って使っていただくという目的がある。中々、その成果を一般の方へ訴えることに全力を投じると届けると、次の刊が出なくなるということにもなるが、色々と考えながらやっていきたいと思う。
- ・この県史を始めるにあたり、地元の教員に本来であればもっと参加いただきたいと思っていたが、今の中高の教員の話の聞くと、非常に忙しい。本来業務以外に、県史の委員になってもらうということは、事実上は難しいという実態はあると思うが、どこかできっかけがあれば、ぜひ結びつけて、一緒に考えていきたい。

5 委員長（高知県知事）総括

濱田委員長よりコメント

- ・本日の熱心な協議をいただき心から感謝。
- ・意見交換でもあったとおり、今年度末には『資料編近世1』ということで、県史としては約半世紀ぶりに刊行物となる予定で準備を進めていただいている。これを皮切りに、来年度以降、各部会の方から資料編が出てくると思うが、刊行に向けて、着実に取り組みを進めていただいていることに感謝申し上げる。
- ・活用に関して、各委員からの意見の中に、特に若い世代に、高知県の歴史を知ってもらう意義、そのためには、教育現場の先生方にも触れていただく機会が改めて必要ではないかという指摘もあり、若い世代に発信をしていくためには、SNSなどを通じた新しい発信のツールを使っていく検討がいるのではないかという提案が印象的。
- ・「県史編さん活用課」ということで組織も設けているため、特に若い世代に、高知県史を知らしめる、県への誇りや愛着を高め、手前みそではあるが、人口減少の一助になるというような切り口で、仮称「県史活用大賞」のようなものを作って表彰してあげるなど、何らかの活用方法について、新しいアイデアや取り組みが出てくるところを少し刺激する手法を事務局でも考えてもらえればと思う。
- ・もちろん委員の皆さま方も、活用される側の研究を進める中での「こんなことがあったらよいのではないか」という思いをお持ちの場合もあるのではないかと思いますし、活用の現場である教育現場や社会の色々な立場でご覧になったときに、活用を進めていくために新機軸、良い取り組みをできるだけ収集して、年に1回ほど表彰してあげるというのも、活用を図っていくための励みや動機づけになるのではないかと思います。

- ・まさしく活用が広がっていくように、先生方には活用されるような興味深い素晴らしい研究をさらに展開していただくように、少し新しいことを考えていただけないかと、お願いしたい。
- ・委員の皆さん毎年ご協力感謝。今後ともよろしくお願いします。

(以上)